

## 流通手段の前貸と資本の前貸(中)

久留間 健

はし がき

- 一 社会的再生産の立場からみた資本の前貸と流通手段の前貸
  - I 『資本論』第二卷第三篇における流通手段の前貸
  - II 個別的資本の回転における貨幣資本の二つの側面
  - III 流通手段の前貸と区別される資本の前貸
  - IV 本章の結論……(以上前号所載)
- 二 『資本論』第三卷第五篇におけるマルクスの諸分析
  - I マルクスのオーヴァーストーン批判
  - II マルクスのトゥーク・フラートン批判
    - (1) ……(以上本号所載)
    - (2)
- 三 スミスにおける資本の前貸と流通手段の前貸との区別

### 二 『資本論』第三卷第五篇におけるマルクスの諸分析

前章では、マルクスが社会的再生産の立場から、流通手段の前貸と資本の前貸との区別を論じているものと考えら

流通手段の前貸と資本の前貸(中)

れる、『資本論』第三卷第五篇第三十三章五七六一―七頁の一節について考察し、そこでマルクスがのべている銀行による流通手段の前貸とは、社会的再生産において資本家自身が行わねばならない流通手段前貸を肩代りするかぎりでの前貸にすぎないこと、その場合に銀行は、前貸を受ける個々の資本家に対して、彼の持っている商品の貨幣形態を前貸するにすぎないこと、を明らかにしたつもりである。

この場合、前貸を受ける個々の資本家は、そのことによって彼の資本の貨幣形態を先取するのであり、彼の商品の販売  $W \rightarrow G$  に先立って購買  $G \rightarrow W$  を行うための追加貨幣、あるいは同じことであるが、流通時間の間追加的に投下せねばならぬ追加的貨幣資本の前貸からまぬがれることになる。

銀行の前貸のうち、流通手段の前貸と規定されるのは以上の場合のみであって、このような流通手段の前貸と対立するのは、資本の本源的な形態としての、すなわち、企業拡張のためであれ、新投資のためであれ、あらたに資本としての運動をはじめるところの貨幣資本の前貸にはかならない。

前章では、マルクスにあっては、流通手段の前貸と資本の前貸との間に、社会的再生産の立場からの明確な区別があることについて考察したのであるが、つぎに、この第三十三章における社会的再生産の立場からの区別は、『資本論』第三卷第五篇においてそれ以前に展開されている貨幣の前貸と資本の前貸とに関する諸分析とどのような関連にあるのか、があらためて考察されねばならない。

『資本論』第三卷第五篇で、貨幣の前貸と資本の前貸との区別が主要な問題として取り扱われているのは、とくに第二十六章と第二十八章なのであるが、これらの諸章では、問題が社会的再生産の立場から扱われているのだ、というマルクス自身による言明はまったくない。しかし、すでに前章で考察したように、第三十三章の一節では、マルクス

自身、社会的再生産の立場から流通手段の前貸と資本の前貸との間に明確な区別が存在することを明らかにしている以上、この区別は、通貨と資本との区別に関する問題が主要な問題として取扱われている二十六・八章での諸分析においても当然に意識されているはずだ、と考えるのがむしろ自然なように思われる。

本章ではこのような視点から、あらためて、『資本論』第三巻第五篇での当問題に関する諸分析を考察していくことにしよう。

問題をつぎの順序にしたがって考察する。

I マルクスのオーヴァーストーン批判。

II マルクスのトトウーク・フライトンの批判。

### (1) マルクスのオーヴァーストーン批判

『資本論』第三巻第五篇第二十六章で、とくに貨幣の前貸と資本の前貸との区別に関してマルクスが批判の対象としているのは、一八五七年の下院の「銀行条例委員会」でのオーヴァーストーンの証言である。

たとえば、証言第三七二九号で彼はつぎのようにのべている。

「割引とはなんのことであろうか？何故ひとは手形を割引させるのであろうか？……もっと大きな資本を入手したいと思うからである」。

ここでマルクスはつぎのような評言をはさんでいる。「(まて！自分の固定した資本の貨幣還流を先取りして自分の事業の停止をまぬがれようと思うからである。満期となった支払の資金をつくらねばならぬからである。より大き

な資本をひとが要求するのは、事業が好調な場合か、事業は不調であっても他人の資本で投機をする場合だけである。割引はけっして事業拡張のための単なる手段ではない。」

オーヴァーストーンはさらにつづけてつぎのようにいう。「では何故ひとは、もっと大きな資本を支配したがるのであろうか？儲かるからである。もつとも、割引料が彼の利潤を呑みこんでしまえば、彼にとっては儲けにならぬでしょう」。

このオーヴァーストーンの証言について、マルクスはつぎのように批判している。

「このひとりよがりの論客は、手形は事業を拡張するためにのみ割引されるもの、事業は儲かるから拡張されるものと想定する。この第一の前提は誤りである。普通の事業家が手形を割引させるのは、自分の資本の貨幣形態を先取りし、もって再生産過程を流動状態に維持するためであって、事業を拡張したり追加資本を調達したりするためではなく、むしろ、自分が与える信用を、受ける信用によって相殺するためである。また彼が信用によって自分の事業を拡張しようとするならば、手形の割引——これは、すでに彼の手にある貨幣資本を一形態から他の形態に転換することとすぎない——は彼にとって殆んど役に立たぬであろう。彼はむしろ長期の固定貸付を借りるであろう。もちろん信用やりくり師は、自分の事業を拡張するために、いかさま事業を他のいかさま事業によってカヴァーするめに、利潤をえるためではなく、他人の資本の占有者となるために、自分のやりくり手形を割引させるであろう」

（『資本論』第三卷四六五頁）。

またオーヴァーストーンは、証言第三七四三号では「お説によれば、一八二五年、一八三七年および一八三九年に生じたパニックの圧迫のもとでは、事業家たちの大きな願は何でしょうか。彼等が手に入れようと目ざすのは資本で

すか、それとも合法的な支払手段ですか？」という質問にたいして「彼等が目ざすのは自分の事業をつづけるために資本にたいする支配を入手することです」とのべている。

これにたいしてマルクスはつぎのように批判している。

「かれらの目的は、おそいきたった信用欠乏のゆえに、また自分の商品を価格以下で売りとばさなくてもすむために、かれら自身宛の満期手形にたいする支払手段を入手することである。かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば、かれらは支払手段と同時にもちろん資本をも入手する。けだし、かれらは等価物なしに価値を入手するからである。貨幣それ自体にたいする要求は、つねに、価値を商品または債務請求権の形態から貨幣の形態に置換えようとする願望にほかならない。だから、恐慌を度外視しても、資本借用と割引——これは、貨幣請求権を一形態から他の形態に、または現実の貨幣に、転形することにすぎない——との間には大きな区別があるのである」(『資本論』第三卷四六七頁)。

マルクスは三十二章でも、ふたたびオーヴァーストーンの資本観にたいする批判にたちかえっているのであるが、そこではつぎのようにのべている。

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以外の何ものでもなく、購買手段としての貨幣にたいする需要ではけつしてない。このばあい利子歩合はひどく昂騰しうるのであって、そのことは現実資本——生産資本および商品資本——が過剰に現存するか缺乏しているかに係わりはない。支払手段にたいする需要は、商品や生産者が確かな担保を提供しうるかぎりでは、貨幣への転換可能性にたいする需要にほかならない。そうでないかぎりでは、つまり支払の前貸が彼等に貨幣形態を与えるばかりでなく、彼等に不足している支払用等価

物——形態の如何をとわない——を与えるかぎりでは、支払手段にたいする需要は貨幣資本に対する需要である」  
（『資本論』第三卷五六〇—五六一頁—傍点は原文のまま）。

以上に引用したオーヴァーストーンの証言およびマルクスのこれに対する批判であきらかなように、オーヴァーストーンは、銀行に対する前貸需要をすべて資本に対する需要だと考えているのであるが、この場合、資本という言葉は同時につきの二つの意味で使われているのである。

第一には、彼は銀行に前貸が求められるのはつねに、より大きな資本を支配するためだ、と考えるのであるが、この場合資本という言葉は、借手がそれによって、自分が持っていなかった資本価値を入手するかどうか、という意味で使われている。

第二には、彼は資本家がより大きな資本を支配しようとするのは、そうすると儲かるからだ、と考えているのであるが、この場合資本という言葉は、借手が入手した貨幣が、現実に資本として、価値増殖過程に前貸されるかどうか、という意味で使われているのである。

銀行の立場からするならば、あらゆる前貸は、銀行資本の投下、利子生み資本の投下にほかならないのであるが、このことによってオーヴァーストーンは、第一に、あらゆる前貸を追加資本の前貸と同一視するのであり、第二に、かかる資本はつねに利潤追求のためのみ需要されると考える。そしてこのことによって、結局貨幣資本に対する需要を現実資本に対する需要と同一視するのである。

したがって、オーヴァーストーンのこのような見解に対しては——すでに三宅教授が指摘されておられるように——

「批判は二通りに行われなければならないのであり」マルクスの批判も「この二つの視角からなされている」のである。<sup>(8)</sup>

(8) 三宅義夫『貨幣信用論研究』三七三頁参照。

すなわち、第一には、手形割引によって生じるのは資本の形態の変化にすぎず、オーヴァーストーンがいうように、割引依頼人にあつた資本が追加されることにはならない、ということを明らかにすることによってであり、第二には、恐慌期に貨幣が必要されるのは、過去の取引の決済のためであつて、オーヴァーストーンのいうように、利潤追求のためではない、ということを明らかにすることによってである。

したがつて、マルクスは、オーヴァーストーンに対する批判を通じて、銀行の前貸につきの二つの区別があることを明らかにしていることになる。

第一に、借手が追加資本を得るかどうか、という視点からの区別。

第二に、借入された貨幣が、現実に資本として、すなわち利潤を生むために、使用されるかどうか、という視点からの区別。

前者が、三宅教授によって指摘されている、貨幣の前貸と資本の前貸との区別に関する、マルクスにおける第一の視点であり、後者が第二の視点である。<sup>(9)</sup>

(9) 本稿のはしがき(『立教経済学研究』第二十卷第二号所載)参照。

ここでつぎのことが問題となる。

マルクスが、二十六章でオーヴァーストーン批判を通じてあきらかにしている銀行の前貸に関するこれらの区別と、

流通手段の前貸と資本の前貸(中)

わたくしが前章で考察した、マルクスが三十三章で行っている銀行の前貸に関する区別とは、どのような関連にあるのか、である。

前章で考察したように、銀行の前貸のうち、社会的再生産の立場から流通手段の前貸と規定されるのは、社会的再生産において資本家自身が行わねばならぬ流通手段の前貸を銀行が肩代りするかぎりでの前貸にすぎない。この場合には銀行は、前貸を受ける個々の資本家に対しては、彼の持っている商品の貨幣形態を前貸するのであり、そのことによって、前貸をうけた資本家は、彼の商品の販売  $G-W$  に先立って購買  $G-W$  を行うための追加貨幣、あるいは流通時間の間再生産を連続的に維持するための追加貨幣資本の投下の必要からまぬがれるのである。

このような流通手段の前貸と対立するのは、資本の本源的な形態としての、資本価値の定在としての、すなわちあらたな資本の運動の出発点としての貨幣資本の前貸である。

わたくしが前章で考察した、社会的再生産の立場からの流通手段の前貸と資本の前貸との右のような区別は、マルクスが二十六章でオーヴァーストーン批判を通じて明らかにしている第一の区別と事実上一致するように思われる。手形割引の場合には、前貸されるものは、借手の資本の貨幣形態にすぎない。割引をうける資本家は、そのことによって彼の資本の貨幣形態を先取し、そうでなかったら追加的に投下せねばならない貨幣資本の投下からまぬがれるのである。

ともあれ、三十三章で区別が論じられる際には、区別はもっぱら社会的再生産との関連でのみ考察され、前貸の具体的な形態はまったく問題とされていなかったのにたいして、この場合には手形割引という具体的な形態そのものが問題とされているのであるから、商業信用——手形流通——とその銀行信用による代位——手形割引——につい



て、かかる視点からより立入った考察をする必要があるだろう。

商業信用および銀行信用によるその代位について。

現金のかわりに信用——手形——で商品を買う資本家は、そのことによって自分の資本の貨幣形態を先取するのであり、流通時間の間追加的に投下せねばならない貨幣資本の投下の必要からまぬがれるのであるが、この追加的な貨幣資本の投下こそは、前章で考察したように、社会的再生産の立場から流通手段の前貸として規定されるものにほかならない。

この場合には、みずから流通手段を前貸せねばなかった資本家が、それだけの貨幣を追加的に投下することなしに——後に行われる彼の資本の貨幣形態での還流をあてにして——みずからの信用で購買するのである。

他方、現金にたいしてではなく手形にたいして自分の商品を販売した資本家にとっては、そのことによって彼の商品の販売  $W - G$  が、すなわち彼の商品資本の貨幣資本の形態への転化が一応行われることになる。ただこの転化はただ最終的には達成されてはいない、というのはこの場合貨幣形態といつてもまだ手形——貨幣請求権——の形をとっているにすぎぬのであり、まだ現金の形態にはないからである。しかし、その手形が現金と同じように——購買手段あるいは支払手段として——流通するかぎりでは、彼にとっては、さしあたり現金で売った場合となんらの相違もないであろう。

手形が現金と同じように流通し、したがって現金のかわりに商業信用によって流通が媒介されるかぎりでは、流通に必要な貨幣量がそれだけ少なくてすむのであり、流通手段前貸の必要もまたそれだけ減少する。

しかし手形が現金と同じように流通を媒介しえぬかぎりでは、すなわち商業信用によって流通が媒介されえないか

ぎりでは、こんどは——手形が支払われる以前に購買ないし支払をする必要がある場合には——信用で売った資本家が、信用で買った資本家に代って、その手形が支払われるまで追加的に貨幣資本を前貸せねばならないことになるだろう。

この場合銀行が手形を割引き、手形の形態にある彼の資本にたいして現金の形態を与えるとすれば、銀行が、再生産にたざさわる資本家自身にかわって、流通手段の前貸を行うことになるだろう。

以上で簡単に考察したように、手形割引は、マルクスが三十三章で社会的再生産の立場からのべている銀行による流通手段前貸の典型的な形態だと考えられるのではないだろうか。

現実の貨幣のかわりに商業信用によって流通が媒介されるかぎりでは、貨幣流通の必要はないのであるから、流通手段前貸の必要もまた存在しない。しかしたんなる商業信用によって流通が媒介されえないかぎりでは、それだけの貨幣の流通が必要とされるのであり、流通手段の前貸もまた必要となる。

したがって、手形割引にたいする要求は、たんなる商業信用によっては流通が媒介されえないことを、そのかぎり<sup>(10)</sup>で、それだけの額の流通手段が前貸されねばならぬことを意味するものと考えられるのではないだろうか。

こう考えてくると、二十六章でオーヴァーストーン批判を通じてマルクスがあきらかにしている銀行の前貸についての第一の区別は、<sup>(11)</sup>彼が三十三章で、社会的再生産の立場から行っている、流通手段の前貸と資本の前貸との区別と一致するものと考えざるを得ない。

(10) 本文でのべたように、手形割引の場合には、銀行は流通に必要な貨幣を前貸するものと考えられる。しかし、銀行は自分の資本を前貸するのではなく、みずからの信用を前貸するのである。発券銀行の場合直接銀行券を発行することによって割引

を行うか、あるいは債券銀行ではなくても、たんなる預金設定によって割引を行うかぎりでは、銀行はたんなる信用——債務——をあらたに創造することによって前貸をおこなうにすぎぬのであり、また他方で預金された現金によって割引を行う場合にも、銀行はそのことによって無準備の自己に対する債務を負うのであるから、やはりみずからの信用にもとずいて前貸を行うのである。

手形割引の場合には、銀行が再生産にたずさわる資本家に代って、流通手段を前貸しするものとしてあらわれるのであるが、これは同時に、現実の貨幣のかわりに銀行の信用——たんなる銀行の債務——によって流通が媒介されることを意味している。社会的再生産の立場から必要とされる流通手段前貸が、ひとつの社会的機構たる銀行によって肩代りされるということは、このような流通手段の節約と結びついてのみ意味を持つのである。かかる意味で、手形割引は、銀行による流通手段の前貸を意味すると同時に、商業信用の銀行信用による代位として規定されるのである。この場合には、たんなる企業の信用に代って銀行の信用が流通を媒介することになる。たんなる市中銀行信用によっては流通が媒介されないかぎりでは、さらに中央銀行信用が求められることになる。とはいえ、この問題の考察の際には、現在のように、中央銀行が市中銀行に対してのみ前貸を行うものとされている場合と、当時のようにイングランド銀行が普通銀行の競争者的な立場にあった場合とは区別して考察されねばならないだろう。

(11) 本文で説明したように、手形割引は社会的再生産の立場からみた流通手段前貸の典型的な形態と考えられるのであり、マルクスが手形割引に関連してあきらかとしている区別、借手が追加資本を得るかどうかという区別は三十三章での社会的再生産の立場からの区別と一致すると考えられる。しかし、こう考えてくると、借手がその前貸によって追加資本を得るのか、あるいは彼の資本の貨幣形態を先取するにすぎないか、ということは、たんなる前貸の形式——手形割引か担保前貸か、あるいは無担保前貸かというような形式——によってのみ区別されるべき問題ではなく、事実上前貸された貨幣が借手の資本の姿態変換との関連において果す役割によって、究極的には、さらに社会的再生産との関連において果す役割によって区別されるべき問題だということになる。

ところで、すでに引用したオーヴァーストーンの証言第三七四三号で示されているように、議会の委員会できとく問題とされているのは、恐慌期の貨幣需要である。

流通手段の前貸と資本の前貸(中)

マルクスが、オーヴァーストーンにたいする批判のさいにのべているように、恐慌期に需要されるのは、とくに過去の取引の決済のために必要な支払手段なのであって、そこでは新投資あるいは企業拡張のための需要は問題にならないし、再生産の連続性もまたかならずしも問題ではない。

前章で社会的再生産の立場からの流通手段の前貸と資本の前貸との区別を考察した際には、再生産が順調におこなわれるものと前提していた。そのかぎりでは、流通手段の前貸と対立するのは、資本の本源的な形態としての、新投資のためであれ、企業拡張のためであれ、あらたに資本としての運動を始めるべき貨幣資本の前貸であった。

恐慌期には、需要されるのは一般的に過去の取引の決済のための支払手段なのであるから、かかる恐慌期において、前章で考察した流通手段の前貸と資本の前貸との対立が依然として意味をもつものであるかどうかは、あらためて考察されねばならない問題である。

恐慌期における貨幣需要は、過去の取引の決済のための支払手段にたいする需要にほかならない、という事情は、銀行による流通手段前貸の必要を無意味にするだろうか。

さしあたりつぎのことはあきらかなように思われる。支払手段として流通するにせよ、購買手段として流通するにせよ、流通に必要な貨幣、すなわち広義の流通手段として把えるかぎりでは、両者の間にはなんらの区別もない、ということである。

流通に必要な貨幣量は、商品流通の必要によって規定されているのであって、恐慌期にも広義の流通手段の必要はけつしてなくなるから、この場合銀行が流通に必要な貨幣を供給するものとしてあらわれるかぎりでは、その前貸はやはり流通手段の前貸として規定されねばならない。

すでのべたように、たんなる手形が流通を媒介しえぬかぎりでは、現実の貨幣が流通を媒介せねばならぬのであって、それだけの流通媒介物があらたに前貸されねばならないのである。

商業信用においては、資本家は相互に信用を与えあうのであり、一方では彼の持っている手形が満期になる以前に、他方では支払わねばならないのであって、信用がもつぱら流通を媒介するようになると貨幣はますます支払手段として機能することになる。

恐慌期はまさに商業信用が制限される時期なのであるから、そのかぎりでは支払手段としての流通手段の必要はかえって増大するのであり、この場合にも、たとえば銀行が手形を割引く際には——その手形が確実なものであるかぎりでは——銀行はやはり流通に必要な貨幣を前貸するにすぎないであらう。

ただ恐慌期において流通手段の前貸と対立するのは、好況期における意味での追加資本——すなわち新投資あるいは企業拡張のための追加資本——ではなく、過去の取引の決済のための不足資本、不足した支払等価物にすぎない。

恐慌期と好況期とを問わず、流通手段の前貸と対立するのは、借手が持っていないところの追加的な資本価値の前貸だという点では同じである、ただ、好況期には、これはあらたに資本としての運動をはじめべき貨幣資本であるのたいして、恐慌期には、過去の取引の支払いのために不足している資本、すなわち他人の資本によって破産をまぬがれるためにのみ需要されるところの不足資本を意味するにすぎない。しかし、社会的再生産の視点からの流通手段の前貸と資本の前貸との区別においては、流通手段の前貸が区別の主体をなしているのであるから、恐慌期においても、この区別はまったくその意味を失わないと考えられるのである。

すでにみたようにマルクスは、恐慌期における貨幣需要について「かれらの目的は、おそいきたった信用欠乏のゆ

えに、また自分の商品を価値以下で売りとばさなくてもすむために、かれら自身宛の満期手形にたいする支払手段を入手することである。かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば、かれらは支払手段と同時にもちろん資本をも入手する。けだし、かれらは等価物なしに価値を入手するからである。貨幣それ自体にたいする要求は、つねに、価値を商品または債務請求権の形態から貨幣の形態に置換えようとする願望にほかならない」といっているのであるが、ここでのべられている「貨幣それ自体」と「資本」との区別は、同時に社会的再生産の視点からの流通手段と資本の区別にほかならないことを考えてはじめて、この区別の意味が十分に明確になるのではないだろうか。

この区別を、同時に流通手段と資本という概念規定の区別として把えることは、きわめて重要なことだと考えられる。というのは恐慌期におけるこれらの区別は、とくに、つぎのようなきわめて現実的な問題とむすびついていると考えられるからである。

恐慌期における貨幣需要が不足した支払等価物にたいする需要を意味するかぎりでは、その場合の要求は恐慌により絶対的に減価したところの自分の資本を他人の資本によって填補してもらうことによって破産をまぬがれようとすることにほかならない。

マルクスは、これにたいして、破産した資本家をすくうことは銀行の義務でもなく、またそのことによって恐慌を回避することは出来ぬことをのべている。

「再生産過程を強力に拡張する人為的な全制度は、もちろん、つぎのこと——すなわち、たとえばイングランド銀行のような一銀行が、その紙券をもって、すべての山師に不足資本を提供し、また、価値の減少した商品全部をもとの名目価値で買うこと——によっては治療されない」(『資本論』第三卷五三〇頁)。

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であつて、それ以外の何ものでもなく、購買手段としての貨幣にたいする需要では決してない。……支払手段にたいする需要は、商人や生産者が確かな担保を提供しうるかぎりでは、貨幣への転態可能性にたいする需要に他ならない。そうでないかぎりでは、つまり、支払手段の前貸が彼等に貨幣形態を与えるばかりでなく、彼等に不足している支払等価物——形態の如何を問わない——を与えるかぎりでは、支払手段にたいする需要は貨幣資本にたいする需要である。これこそは、通説の両面が恐慌の判断にさいして正鵠をえ、また間違えている点である。このばあい支払手段が缺乏しているにすぎぬと云う人々は、受けとつた商品にたいする手形その他の証券の所有者だけを眼中においているか、さもなければ、紙片によってあらゆる破産した思惑師たちを支払能力のある堅実な資本家たらしめることは銀行の義務であり為しうるところだと信じている愚物である」（『資本論』第三卷五六〇—五六一頁—傍点は原文のまま）。

たんなる紙券の発行によって不足した支払等価物を供給することによつては恐慌を回避することは出来ない、ということは、この場合不足しているのはけつして流通手段ではないということの意味している。

単純な貨幣数量説にしたがえば、恐慌はたんなる貨幣あるいは流通媒介物の不足を意味するのであるから、そこに、たんなる通貨の増発によつて恐慌を回避しうるといふ妄想が生じることになる。

しかし、恐慌はけつして流通手段の不足にもとづくのではないとはいへ、恐慌期においてもまた支払手段としての流通手段の必要は存在するのであるから、この場合銀行による流通手段の前貸が人為的に制限されるならば、流通手段の不足が逆に混乱を増大させるということはありうることである。

マルクスは、一方では、たんなる紙片の発行によつて恐慌を回避することは出来ないとのべていると同時に、他方

では、「一銀行の信用が震撼されていないかぎり、その銀行が信用貨幣を増加すればかかる場合にパニックが緩和される——信用貨幣を引揚げればかえってパニックが増大する——ということは明らかである」（『資本論』第三卷五六二頁）「一八四四—四五年のそのような無知で誤った銀行立法は、こうした貨幣恐慌を甚だしくしうる」（『資本論』第三卷五三五頁）といい、第五二二九号での一八四七年恐慌に関するチャプマンの証言につづいて「十月二十五日の木曜日には、銀行条例が停止されて、恐慌がおしまいとなった」（『資本論』第三卷五八三頁）とさえのべているのである。

これらの二つの見解は一見すると矛盾するようにみえる。しかし、恐慌期における中央銀行の役割に関するこのようなマルクスの評価は、社会的再生産の視点からする「流通手段の前貸」と「資本の前貸」との区別にもとづくのだと考えるなら、きわめて明確に理解されるのではないだろうか。

マルクスが、中央銀行が紙片を増発することによって破産した資本家を救うことは出来ないといっている場合、そのことは紙片の印刷によって不足資本を造り出すことは出来ぬということを意味している。

これに反して、マルクスが——ピール銀行条例を批判して——恐慌期には銀行が信用貨幣の発行を増加するならばパニックを緩和することが出来るという場合には、もっぱら確実な手形その他の所有者が、つまりそれだけの資本を所有していてたんにその貨幣形態のみが求められる場合が念頭におかれているのである。この場合、借手から見てのたんなる貨幣形態に対する需要は——すでにのべたように——社会的再生産の立場から見た流通手段の前貸にたいする需要にほかならない。

すなわち、恐慌期においても、貨幣需要がたんに流通に必要な流通媒介物にたいする需要を意味するかぎりでのみ、中央銀行がその前貸を人為的に制限するならば無用の混乱が生じるのであり、中央銀行がその銀行券発行の制限



をとりのぞくことによつてかかる混乱が解消するのである。この両者の区別は、流通手段と資本という概念規定の区別の問題としてはじめて、その意味が明確となるであらう。たんなる紙片によつて不足した資本価値を造り出すことは出来ない、しかしたんなる紙券でも流通手段としてはそれだけの金に代つて貨幣として機能しうるからである。<sup>(12)</sup>

(12) 恐慌期における貨幣需要がどこまで流通手段に対する需要をあらわすのか、どこから不足資本にたいする需要をあらわすのかという区別は、現実にはきわめてあいまいなものとなるであらう。たとえば、貨幣前貸にたいする需要がたんに彼の資本の貨幣形態での還流のおくれから生じるかぎりでは、すなわちたんなる再生産過程の速度の変化から生じるかぎりでは、かかる貨幣需要は貨幣の流通速度の変化による流通必要量の増大を反映するにすぎぬであらう。これに反して、前貸需要がたんなる貨幣形態での還流のおくれからではなく、過剰生産にもとづく資本価値の減価から生じるならば、その場合には前貸需要は同時に不足資本に対する需要を意味するであらう。あるいはまた、前貸需要が——その手形が確實であるにもかかわらず——一般に信用にたいする不安のため手形流通が制限されることから生じるかぎりでは、この場合には信用が制限されることによる支払手段としての貨幣の必要量の増大を反映しているにすぎぬであらう。

しかしこれらの区別はかならずしも事前には明らかではないのであって、結果としてのみ明確にあらわれるであらう。といふのは恐慌期には確實なものは何もなくなるのであって、たとえばある手形が確實なものかどうかは、支払われたときにのみはじめて実証されるだらうからである。いづれにしても、銀行によつて前貸された貨幣は、それが流通手段の前貸を意味するかぎりでは、借手の資本からでなく彼の資本の予定された貨幣形態の還流にもとづいて返済されることになるであらう。

すでに『資本論』二巻三篇の考察によつて明らかのように、流通手段の前貸の際には、前貸された貨幣額は流通の必要を満たすのちには還流するのであるが、この還流は、その社会的再生産の媒介に必要な貨幣の前貸という規定そのものによつて予定されているのである。しかし、これは同時に社会的再生産が攪乱なしに媒介されるという前提を含んでいる。もしも社会的再生産そのものが中断して予定された商品の販売W—Gが不可能になるならば、この商品の販売W—Gを予定して投下した追加貨幣は彼のもとに還流しないことになる。この場合には社会的再生産そのものが中断し、貨幣が流通手段としての規定から価値の定在そのものとしての規定に転化するのであつて、その貨幣投下は——結果的には——流通手段の前貸を意味しなかつ

たのである。なおこの問題については本稿第一章(『立教経済学研究』第二十卷第二号所載)一六頁および二三頁の図を参照されたい。

以上で、マルクスがオーヴァーストーンの批判を通してあきらかにしている、銀行前貸において需要されるものは何かという問題に関する二つの区別のうち、三宅教授によって指摘されている第一の区別は、マルクスが社会的再生産の立場からおこなっている流通手段の前貸と資本の前貸との区別と一致することについて考察した。

この場合銀行は、前貸を受ける個々の資本家に対しては、彼の資本の将来の貨幣形態を前貸するのであり、社会的再生産の立場からするならば——そうでなかったら資本家自身が前貸せねばならなかった——流通手段を前貸するのである。

つぎに、三宅教授によって指摘されている第二の区別——借受けられた貨幣が現実に資本として利潤追及のために投下されるかどうかという区別——についてであるが、この場合に対立するのはけっして流通手段という規定性における貨幣と資本ではない。

オーヴァーストーンは、貨幣前貸への需要をすべて企業拡張あるいは新投資のための需要と考えるのであり、このことにより貨幣資本にたいする需要を現実資本にたいする需要と同一視するのである。このことのうちに、すでに二つの混同が含まれているのであって、マルクスはこれを以上の二つの視点から批判しているのである。

したがって、このようなオーヴァーストーンの見解に対する批判はたんに流通手段と資本との区別をあきらかにすることによっては与えられないのであり、貨幣資本の運動と現実資本の運動との区別と関連をあきらかにすることによってのみ、全面的に与えられるべきものである。とくに彼の誤りの第二の側面は、彼が好況期における貨幣需要と

恐慌期のそれとを同一視することにあるのであるから、これにたいする批判は、恐慌期における貨幣需要の性格を右のような視点からあきらかにすることによってのみ与えられることになる。

二十六章では、オーヴァーストーンの批判を通して二つの問題が、ひとつには流通手段と資本との区別の問題が、またひとつには、信用論にとってより包括的なたがってより中心的な意味を持つているところの、現実資本と貨幣資本との問題が提起されていると考えられるのではないだろうか。

## Ⅱ マルクスのトゥーク・フライトン批判

すでに見たように、『資本論』第三卷第二十六章では、オーヴァーストーンによって代表される通貨学派の資本観が批判されているのであるが、これにたいして、第二十八章はトゥーク・フライトンによって代表される銀行学派の流通手段と資本との区別に関する見解の批判にあてられている。<sup>(13)</sup>

(13) 第二十七章のおわりに近く、マルクスはつぎのようにのべている。「以上でわれわれは、信用業の発展——および、そのうちに含まれている資本所有の潜在的止場——を主として産業資本に連関させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものに連関させて——利子生み資本に及ぼす信用の影響、ならびに、このさいに信用がとる形態を——考察するがそのさい一般的になお若干の特殊経済的な注意をなすべきである」(『資本論』第三卷四八二頁)。二十八章の解釈のためには、この文章の理解が重要な意味を持つと考えられるのであるが、この文章についてはわたくしはまだ充分に理解することが出来ないでいる。

すでにみたように、オーヴァーストーンにあっては、流通手段の前貸と資本の前貸との間の区別は存在しないのであるが、これにたいして銀行学派は、流通手段と資本の区別の必要を強調しているのであり、二十八章は彼等の主張

する流通手段と資本との区別における様々の混乱の批判にあてられているのである。

銀行学派の場合には、はじめから流通手段と資本という概念規定の区別そのものが問題とされているのであるから、流通手段と資本との区別に関する彼等の見解が批判されている二十八章は『資本論』で流通手段と資本との区別が問題とされている主要な章だということになる。このことは二十八章が「流通手段と資本。トワーク及びフラートン」という表題を付せられていることから明らかのように思われる。<sup>(14)</sup>

(14) この表題で流通手段とされている際の原因はZirkulationsmittelではなくUmlaufmittelである。なお第三巻第五篇はマルクスの未完成の草稿をエンゲルスが現在の形に編集したものであるため、各章の表題がはじめからマルクスによって付されていたものか、あるいはエンゲルスによってあらたに付されたものかはひとつの問題となる。しかし二十八章はとどころ配列を変えてはあるが、ほとんど原稿に従って作られているのであるから、この表題もおそらくマルクスが付していたものと考えてよいであろう。——第三巻へのエンゲルスの序言参照——。

しかし、実際に二十八章の内容をみていくと、つぎのような種々の問題が出て来る。

わたくしが本稿で考察して来たように、マルクスにあつては、社会的再生産の立場からする流通手段の前貸と資本の前貸との明確な区別が存在する。したがって通貨と資本との区別に関する銀行学派の混乱が批判されている二十八章においても、当然に、いままで考察してきたマルクス自身による通貨と資本との区別が意識されていると考えるのが自然であろう。

ところが、二十八章では、わたくしが考察してきた社会的再生産の立場からするところの区別は——すくなくとも直接には——どこにもふれられていないのである。

のちに見るように、二十八章の内容は、銀行学派が通貨と資本との区別として主張する諸区別にたいして、それら

はけつして通貨と資本との区別ではないということを明らかにすることにあてられているのであって、マルクス自身による通貨と資本との区別に関する積極的な説明はどこにもなされていない。すなわち、二十八章で実際に分析されているのは、じつはトゥーク・フラートン等が通貨と資本との区別に転化しているところのその他の諸区別なのであり、通貨と資本との区別ではないのである。

このように、二十八章では、流通手段と資本に関するマルクス自身による積極的な区別はのべられていないのであるから、つぎのことがあらためて問題とされねばならない。

二十八章で、トゥーク・フラートン等の主張する流通手段と資本との区別を批判する際、マルクスは、同時に、彼等が主張する流通手段と資本との概念規定の対立そのものをも、無意味な対立として批判しているのか、あるいは、彼等を批判する際に、マルクス自身、流通手段と資本との対立をひとつの現実の意味のある対立として評価し、このような、本来あるべき区別にもとづいて、この区別をその他の諸区別と混同するところの彼等を批判しているのか、である。

後者の場合のみ、彼等を批判する際に、マルクスが意識していると考えられる区別はどのような区別なのかが、あらためて考察されることになる。

本節では、まず最初に、二十八章のマルクスによるトゥーク・フラートン等に対する批判を、その叙述の順序にしたがって整理し、その後以上のような視点から、彼らを批判する際のマルクスの問題意識についてあらためて考察することにしよう。

(1)

マルクスは二十八章をつぎの文章ではじめている。

「トゥーク・ウイルソンその他によってなされる流通手段と資本との区別は——そこでは、貨幣としての・貨幣資本一般としての・および利子生み資本としての流通手段の間の区別がごっちゃに混同されるのであるが——つぎの二つのことに帰着する」<sup>(15)</sup>。

(15) ここで流通手段と訳されている言葉は原語ではZirkulationである。これはトゥーク等がCirculationといういい方をするのに照応して使われているものである。

ここで引用されているトゥークの文章はつぎのものである。

「銀行業者たちの業務は——要求次第に支払われうる約束手形〔銀行券〕の発行を除外すれば——二つの部門に分割されうるのであって、これは、(アダム)スミス博士によって指摘された商人と商人との取引と、商人と消費者との取引との区別に照応する。銀行業者たちの業務の一方の部門は、資本をばその直接的用途をもたない人々から集めること、およびそれをば、かかる用途をもつ人々に配分または移譲することである。他方の部門は、彼等の観客たちの収入からなる預金を受けいれること、および、観客たちが彼等の消費目的で支出するために要求するだけの額を払出すこと、である。——前者は資本の流通であり、後者は貨幣の流通である」。

「前者は一面では資本の集積、他面では資本の配分である。後者は近隣の地方的目的のための流通手段の管理である」<sup>(16)</sup>。

(16) このトゥークの文章はすでに第二十五章「信用と仮空資本」で銀行信用についてのべられているところでも引用されており、『資本論』第三卷四四〇—一頁)そこでは「この箇所には第二十八章で立ちかえる」とされている。

ここで注意すべきことは、この文章で、トゥークは、通貨と資本との区別の問題として、二つの異なった問題を論じているということである。第一にトゥークが問題としているのは、銀行の果す役割の問題である。すなわち彼は、銀行は二つのまったく異なった役割を果していると考えるのである。この場合彼が考えているのは、(1) 資本を、その直接的用途をもたない人々から集め、それをかかる用途をもつ人に配分または移譲すること(資本の流通)。(2) 彼らの顧客たちの収入からなる預金を受け入れ、顧客たちが要求する額を払出すこと(貨幣の流通)の二つである。そしてつぎにこの両者の区別はA、ミスミによって指摘された商人と商人との間の取引と商人と消費者との間の取引との区別に照応すると主張しているのである。

このトゥークの文章に対するマルクスの批判を見ていくと、

マルクスは第一に、トゥークが商人と消費者との間で機能する貨幣と商人と商人との間で機能する貨幣との区別を流通手段と資本との区別として主張しているのにたいし、「この区別は、事実上収入の貨幣形態と資本の貨幣形態との区別であって、流通手段と資本との区別ではない」ことを明らかにしている。<sup>(17)</sup>

(17) マルクスが二十八章のはじめに、トゥークその他によってなされる流通手段としての区別においては、貨幣としての・貨幣資本一般としての・および利子生み資本としての・流通手段の間の区別が混同される、といっている際の「貨幣としての流通手段」というのは、恐らくここでいわれている収入の貨幣形態を指し、「貨幣資本一般としての流通手段」というのは、恐らくここでいわれている資本の貨幣形態のことを指すのではないかと思われる。

つぎにマルクスは「ところでトゥークの見解には、つぎのような諸事情によって種々の混乱が入りこむ」として、

(一) 機能的諸規定の混同、

(二) いっしょにした双方の機能で流通する貨幣の量にかんする問題の混入、

(三) 双方の機能で——したがって再生産過程の双方の部面で——流通する流通手段の分量相互間の相対的比率に

流通手段の前貸と資本の前貸

かんする問題の混入、

以上三つの事情をあげている、

(一) 「機能的諸規定の混同」では、

貨幣は、それが収入の貨幣形態としてあらわれる場合には、とくに本来的流通手段（鑄貨、購買手段）として機能することが多く、他面、流通手段が資本の貨幣形態をなす商業世界の交易においては、貨幣は主として支払手段として機能するのではあるが、購買手段としての貨幣と支払手段としての貨幣との区別はけっして流通手段と資本との区別ではないということが明らかにされている。

そして同時に、トゥークがこれらの区別を資本と流通手段との区別に転化させることの背後には、トゥークの単純な銀行業者の立場がひそんでいて、トゥークを批判している。というのは、つねに公衆の手にあつて流通する銀行券の額は、銀行にとっては紙と印刷費以外に何も要しないのであり、銀行にとつての資本を意味しないということによつて、トゥークには、これのみが通貨の前貸だと映じるからである。

貨幣が主として収入の貨幣形態として機能する場合には、前貸された銀行券は流通に比較的ながくとどまるために、このことがトゥークの単純な銀行業者の立場とむすびついて彼の通貨と資本に関する独自の区別の一原因となつているのである。<sup>(18)</sup>

(18) ここでマルクスはトゥークを銀行業者的な立場から通貨と資本との区別を見ているとして批判しているのであるが、同じ批判が、のちに見るように、フラートンに対してもなされている。

マルクスが二十八章のはじめに、利子生み資本としての流通手段といつてゐるのは、トゥーク・フラートン等がおこなつてゐるこの銀行業者の立場からの区別を指しているものではないかと思われる。



(二) 「いっしょにした双方の機能で流通する貨幣の量にかんする問題の混入」では、購買手段として流通するにせよ支払手段として流通するにせよ、また収入の実現として機能するか資本の実現として機能するにかかわりなく、流通する貨幣の量は、単純な商品流通を考察した際に展開された貨幣流通量の法則によって規定されるということがのべられている。

トウクその他が、アダム・スミスにしたがって、収入の貨幣形態と資本の貨幣形態との区別を流通手段と資本との区別に転化することの背後には、スミスの  $V+m$  のドグマが横たわっているのであるが、これは、消費者は窮極的には総生産物の総価値を支払わねばならぬのであり、年収入の流通に必要な貨幣量は年生産物全体の流通のためにも充分だ、というようにも表現されるのである。したがって彼等の場合には、銀行が所得の支出を媒介する貨幣を供給するならば、その場合には、銀行は同時に社会全体に必要な通貨量を供給するはずだと考えることになる。この誤った考えが、彼等による通貨と資本に関する独自の区別のひとつの根拠になっていると考えられるのであるが、ここで「いっしょにした双方の機能で流通する貨幣の量にかんする問題の混入」としてマルクスが批判しているのは、おそらくスミスの  $V+m$  のドグマにもとづく以上の誤りではないかと思われる。マルクスは流通に必要な貨幣量はすでにのべた流通貨幣量の法則によって規定されていることをのべることによって、それはけっして所得の支出に必要な貨幣量のみによって規定されているのではないことをあきらかにしているのではないかと思われる。——ともあれ、この問題については後にあらためて考察しよう——。

(三) 「双方の機能で——したがって再生産過程の双方の部面で——流通する流通手段の分量相互間の相対的比率にかんする問題の混入」では、

繁栄期には、収入の支出に用いられる流通手段の量が決定的に増大するが、資本の移譲に必要な流通手段は相対的に減少するということが、また恐慌期には逆の関係にあること、前者は収縮し後者は増大するということがあきらかにされている。

トゥーク・フラートン等は、流通手段に対する需要と資本に対する需要との対立を、とくに好況期と恐慌期との區別として主張しているのであるが、この(三)では、彼らのこのような見解にたいして、好況期においては主として収入の支出を媒介する貨幣量が増大し資本の移転に必要な貨幣量が縮小するのにたいして、恐慌期は前者が縮少し後者が増大するのであるが、この両時期におけるこのような區別はけっして流通手段と資本との區別ではないことが明らかにされているのである。

マルクスは、ここで、最初に引用されたトゥークの文章にたいする批判をおえ、

「信用の減少——これは再生産過程の停滞と一致する——の際には、Ⅰ（収入支出）に必要な流通手段分量は減少するが、Ⅱ（資本移譲）に必要なそれは増加する、ということにはまったく何の疑いもない。だがこの命題が、フラートンその他によって定立されたつぎの命題とどこまで同一であるかは、研究を要する。曰く——『貸付資本の需要と追加的流通手段の需要とはまったく別々のものであって、両者が結びついていることは余りない』と」（『資本論』第三卷四九〇頁）とのべて、つぎにフラートンに対する批判に移っている。

ここで引用されているフラートンの文章はつぎのものである。

「貨幣融通にたいする（すなわち資本の貸付にたいする）需要は追加的流通手段にたいする需要と同一であると考えられることはもちろん、両者はしばしば結びついていると考えることさえも、実は大きな誤りである。どちらの需要も、

特にそれ自身を左右する、そして相互にまったく相異なる、諸事情を原因とする。万事が好調に見えるとき、賃金が高く、物価が騰勢で工場が繁忙なとき、そうしたときには、より大きくより頻繁な諸支払をなす必要と不可分な追加的諸機能を果たすために、通常、流通手段の追加的供給が必要とされる。しかるに、利子歩合が昂騰して資本の前貸を求め、イングランド銀行への圧迫が加えられるのは、主として、商業循環のより進んだ段階においてであり、諸困難が現われはじめるとき、市場が充溢をきたして還流が遅滞するときである。イングランド銀行は通常、その銀行券以外の手段では資本を前貸しないということ、だから銀行券の「発行」拒否は融資の意味するということは正しい。だが、融資がひとたび許諾されるならば、万事は市場の必要に応じて進行する。貸付は残り、流通手段は、それが使用されない場合には発行者のもとに帰ってゆく。その結果、イギリス議会議事報告書を皮相に吟味しただけでも納得されうるように、イングランド銀行の手もちの有価証券の高は、しばしば、その銀行券流通高と同じ方向によりもむしろ反対の方向に変動するのであり、したがってこの大銀行の実例は、地方銀行業者によって強調される命題——すなわち、どの銀行も、その銀行券の流通高が諸目的（銀行券通貨が普通に充用される諸目的）にすでに適合している場合にはその流通を増加させえないということとは別として、この限界を超えた銀行券前貸のあらゆる追加はその銀行の資本から行われねばならず、その保有する有価証券の若干を売るか、かかる有価証券へのそれ以上の投資を断念することによって調達されねばならぬ、という命題——の例外をなすものではない。——以下略——。

フラートンは、この文章のはじめに、好況期には通常流通手段の追加的供給が必要とされるのにたいし、資本の前貸が求められるのは恐慌期の特徴だ、とのべているのであるが、この場合フラートンが資本にたいする需要といっているのは、貸付資本に対する需要（Demand of capital for loan）のことであって、これにたいして通貨の需要と

いっているのは、銀行券流通に対する需要のことである。

これにたいしてマルクスは、「だが、フラートンがあげような対立は正しくない。不況期を繁栄期から区別づけるものは、彼のいうように貸付にたいする強い需要では決してなく、この需要が充たされるための繁栄期における容易さと、不況期にはいつてからの困難さである。……だから両時期を特徴づけるものは、貸付にたいする需要の大きさの区別ではない」とのべ、ふたたび「すでに以前にのべたように両時期は、さしあたり、繁栄期には消費者と商人との間の流通手段の需要が重きをなし、後退期には資本家たちの流通手段の需要が重きをなすということによって区別される。不況期には前者が減少して後者が増加する」として、流通手段に対する需要と資本に対する需要との対立を両時期の対立として主張するフラートンの見解を批判している。

ところで、フラートンは、イングランド銀行手持ちの有価証券の高が、しばしばその銀行券流通高と逆の方向へ変動する、ということをも、自分の見解の例証としてあげているのであるが、つぎにマルクスはこれについての批判にうつっている。

さて、フラートンは、すでにみたように、銀行券流通にたいする需要のみを通貨の需要と考えている。銀行券は公衆の必要とする以上には流通しないし、必要がなければ還流する。したがって、もし前貸された銀行券が還流しないならば、それは通貨にたいする需要があることを意味し、還流した場合には通貨にたいする需要がなかったことを意味する。しかしその場合には、通貨に対する需要はないにもかかわらず前貸にたいする需要はあったことになる——これは銀行のSecurityの増加にあらわれている——。そして、この場合、通貨にたいする需要をこえた前貸はその銀行の資本のうちから行われねばならぬのだ、とフラートンは考えるのである。

つぎにマルクスが、フラートンのこのような見解を、どのように批判しているかについて見ていこう。

マルクスは、第一に、フラートンがこの場合資本の前貸とのべていることについて、「だがここで、フラートンが資本を何と解するかも分る。ここにいう資本とは何か？イングランド銀行はもはやそれ自身の銀行券——同銀行にとつてはもちろん何も要費しない支払契約書——をもっては前貸をなしえない、ということである」「これら一切の事情のもとでは、資本なる言葉はこの場合、ただ銀行業者の意味でのみ使用されているのであって、銀行業者は自分の単なる信用よりも多くのものを貸付けることを余儀なくされている、ということの意味する」としてこれを批判している。

これは、さきに(一)「機能的諸規定の混同」という項目のなかでマルクスがトウークを批判している際の視点と同一である。

そして、つぎに、フラートンが自分の見解の例証としてあげている、イングランド銀行手持の有価証券の高が増大する場合にその銀行券流通高が減少するという現象について、この場合前貸に用いられた銀行券はどのようにして同銀行に還流するか？という問題を設定している。(『資本論』第三卷四九三—四頁)。

これについて、第一に貨節融通を求める需要が金流出を媒介する場合についてのべ、「いまもし人あって、イングランド銀行はこの場合には資本を前貸するのであつて流通手段を前貸するのではないというならばこれには二重の意味がある」として、第一に、この場合イングランド銀行が前貸するのは信用ではなく現実的価値であり、同銀行の資本の一部分だということ、第二には、同銀行が前貸するのは国内流通のための貨幣ではなく、国際流通のための貨幣すなわち世界貨幣だということ、の二つを挙げている。

フラートンは、資本という言葉を銀行の立場からのみ解するために、世界貨幣としての金が需要される場合を、流通手段に対する需要と対比して、資本に対する需要だと考えているのであるが、この場合対立するのは、じつは、国内流通のための貨幣に対する需要と世界貨幣としての貨幣に対する需要にはかならないのである。そしてこのような視点から、マルクスはそれが国内的流通手段の問題ではないということ、決して、フラートンその他の考えるように、資本の問題だということではない、たんなる流通手段とはちがう規定においてではあるがやはり貨幣の——世界貨幣としての貨幣の——問題なのだ、としてフラートンを批判しているのである。

つぎに、ふたたび「ところで、金流出のことは別として、発券銀行したがって例えばイングランド銀行は、如何にして、その銀行券発行を増加しないで、その提供する貨幣融通額を増加しうるか？」という設問をしている。（『資本論』第三卷四九七頁）。

これについては、前貸を拡張した際に発行される銀行券の還流は二様の仕方で生じうる、として、  
 第一に、Aにたいし有価証券とひきかえに銀行券を支払い、Aがこの銀行券をもつてBに支払い、Bがこの銀行券をふたたび同銀行にあずける場合（預金による還流の場合）、

第二に、AがBに支払い、BまたはBから銀行券を支払らわれたCが、この銀行券をもつて銀行あての満期手形を支払う場合（返済による還流の場合）、の二つの場合を挙げている。

そしてこれにつづいて、さらにつぎのような問題を設定している。

「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸とみなされ、またどの範囲でたんなる支払手段とみなされるべきであるか？」（『資本論』第三卷四九七頁）。

この場合には、すでに三宅教授が指摘されているように、マルクス自身、資本という意味をフライトンがいう意味ですなわち銀行にとつての資本という意味で、用いているのだと考えられる。

これが三宅教授によつて指摘されている、マルクス自身が行つているところの、貨幣の前貸と資本の前貸との区別に関する第三の視点だということになる。(『貨幣信用論研究』四〇五頁参照)。

これについて、マルクスは、

「私営の銀行業者の場合には、その銀行券が地方的流通にとどまらず、また預金の形態でも満期手形の支払いのためにもその銀行自身にかえつてくることもないとすれば、その銀行券は(結局)その銀行がそれと交換して金またはイングランド銀行券を支払わねばならぬ人々の手に帰する、ということ、この場合には、その私営銀行の銀行券前貸は事実上イングランド銀行券または——その銀行にとつては同じものだが——金の前貸を、つまりその銀行の銀行資本の一部分を代表する」とのべ、ついで「同じことは、次の場合、すなわち、イングランド銀行自身または、銀行券の発行限度を法定されているその他の或る銀行は、その自己銀行券を流通から引き上げてから再びそれを前貸として発行するためには有価証券を売らねばならぬ、という場合についてもいえる。この場合には、これらの銀行の自己銀行券は彼等の流動銀行資本の一部分を代表する」とのべている。

つぎに、マルクスは——これまでは前貸はつねに銀行券でなされると想定されていたのにたいして——流通手段が純粹に金属であると想定される場合と、逆に前貸が帳簿信用によつてなされ、はじめから銀行券発行を伴わない場合の兩者について、考察を行っている。

さらにマルクスは、ふたたび「貨幣融通にたいする需要が資本にたいする需要であるかぎりでは、それは貨幣資

本、銀行業者の立場からみても資本を求めめる需要、すなわち金……または国立銀行券を求めめる需要に他ならぬ……」とのべ、そこで同時に、金または銀行券を得るために有価証券を売る場合について考察し、この場合には、その有価証券は彼の投下資本をあらわしている、ということについてのべている。

すなわち、以上では、フラートンが資本の前貸といっている場合には、資本という言葉は銀行業者の立場からのみ使われていることを指摘すると同時に、このような意味で資本の前貸と規定される場合についての考察がなされていることになる。

つぎに、マルクスは、以上の考察につづいて、フラートンをして混乱させるところの現象について、「流通手段の総分量は同等不変または減少するのに、どうして、イングランド銀行が担保として保有する有価証券の分量が増大しうるかは、……極めて簡単に説明できる」(『資本論』第3巻五〇一頁)としてつぎの二つの事情をあげている。

(一) 金の流出。

(二) たんなる支払手段としての貨幣にたいする需要。

そして後者について、「この場合には、発行された銀行券がすぐ還流するか、または帳簿信用によって取引がぜんぜん銀行券発行なしに片づくのであり」「貨幣がたんに諸支払の決済のために機能する場合には」「貨幣の流通は一時的にすぎぬということ、つまり貨幣融通を求めめる殺到が大きくても流通手段の拡大なしに尨大な取引が行われうるということ、こうしたことは貨幣の独自性である」と説明している。そして、恐慌期には、前貸は増えても銀行券流通量が減少するという事実、トゥーク、フラートンがいうように、支払手段として機能する貨幣の流通が増加しないということを証明するものではけっしてない、として、「発行銀行にすぐ還流する銀行券の支払手段としての流通



は、かの経済学者たちの眼には何らの流通でもないのである」とのべ、つぎの言葉によってフラートンに対する批判を終っている。

「だが、明らかにフラートンは、購買手段としてのこの貨幣と支払手段としての貨幣との区別を、流通手段と資本との誤った区別に転化している。しかもその基礎には、またしても、流通手段にかんする銀行業者的表象が横たわっている」(『資本論』第三卷五〇二頁)。

そして最後に、あらためてつぎのような問題設定をしている。

「なお、つぎの質問が生じうる。いったい、かかる逼迫期に欠けているのは何か？資本であるか、支払手段としての規定性をもつ貨幣であるか？これは周知のように競争問題である」。

そして、これについては、「……だから、いずれにしても、逼迫の原因は商品資本の缺乏ではない。この問題にはのちに立ちかえろう」とのべて二十八章を終えている。

ここで、マルクスのフラートンにたいする批判を簡単に整理しておこう。

フラートンは、銀行券流通にたいする需要のみを通貨の需要だと考える。したがって銀行の前貸がその銀行券流通の増大を伴う場合にのみ、その前貸を通貨の前貸と考え、これを超える前貸は銀行の資本のうちからなされねばならぬ、と主張しているのである。

すなわち、ここでフラートンのいう通貨の前貸と資本の前貸の区別は、じつはつぎの二つの区別を含んでいることになる。

(一) ここでフラートンのいう通貨の前貸とは銀行券流通量の増大を伴うかぎりでの前貸である。——この場合に

は区別の基準は、銀行の前貸が、銀行券流通量の増大を伴うか、伴わないか、ということにある。

(二) ここでフライトンがいつている資本の前貸とは、その前貸が銀行の資本——準備——にはねかえってくるかぎりでの前貸である。——この場合には、区別の基準は、銀行がたんなる信用にもとずいてその前貸を増大しうるかどうか、ということにある。

そして、フライトンは両者をひとつの区別として同一視しているのである。

マルクスのこれにたいする批判を整理してみると。

(一) 銀行券流通高の増大を伴うかぎりでの前貸を通貨の前貸と考えることにたいして。

貨幣は購売手段として流通する場合、すなわち、主として収入の貨幣形態として流通する場合には、比較的流通にながくとどまるのであるが、支払手段として流通する場合には、すなわち、とくに資本の貨幣形態として流通する場合には、流通は、はじめから帳簿信用によって、銀行券の介入なしに行われるか、あるいは銀行券増発を伴うにしても、流通にながくとどまることなく銀行に還流する。この場合、フライトンは前者のみを流通手段の前貸と考えていることになるが、彼は、この場合、あきらかに購売手段としての貨幣と支払手段としての貨幣との区別を流通手段と資本との誤った区別に転化している。

また、フライトンが銀行券流通高の増大を伴うかぎりでの前貸を通貨の前貸と考えるのは、銀行券はたんなる銀行の信用にすぎず、銀行資本を意味しない、という理由にもとずいてるのであるが、この場合、フライトンは偏狭な銀行業者的立場から区別を見ているのである。

(二) 銀行がたんなるその信用によって前貸を行いうるかどうか、の区別について。

フラートンはこれを一の区別と同一視しているのであるが、この場合には、区別は、じつは、一銀行にとつて、需要されるものが、金または——地方銀行の場合には——中央銀行券にたいする需要を意味するかどうか、ということである。これらの区別も、フラートンが主張するように、資本にたいする需要と流通手段に対する需要との区別ではない。

(三) フラートンは以上のような混同とむすびついて、流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との区別を、とくに好況期における貨幣需要と恐慌期における貨幣需要との区別に転化するのであるが、好況期には、とくに所得の支出に必要な貨幣の量が増大し、恐慌期には資本の移譲に必要な貨幣の量が増大するのであって、恐慌期にも、後者の増加度が前者の減少度よりも高ければ、両者をあわせた総流通手段の必要は増大しうる。したがって、この兩時期を、流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との区別によって特徴づけることは誤りである。

大体以上のように整理しうるのではないだろうか。

以上で二十八章におけるマルクスのトゥーク・フラートンの批判について簡単に考察したのであるが、これによつてあきらかなように、二十八章は、もっぱら、トゥーク・フラートンが流通手段と資本との区別として把えているさまざまな諸区別について、それらはけつして流通手段と資本との区別ではないこと、それぞれに現実の意味のある区別ではあつても、けつして流通手段と資本という概念規定の区別ではないことを、あきらかにすることにあらわれている。

第一には、彼らが資本の貨幣形態と収入の貨幣形態との区別を資本と流通手段との区別に転化することによつて、それらはけつして資本と流通手段との区別ではないことがあきらかにされている。また前者においては貨幣は主

として支払手段として機能し、後者においては貨幣はとくに購買手段として機能するとはいえ、これもけっして資本と流通手段との区別ではないことが明らかにされる。さらにこのことと結びついて、彼等は好況期と恐慌期との貨幣需要の区別を両者の区別に転化させるのであるが、これもけっして流通手段と資本との区別ではないことがあきらかにされる。またフライトンにあつては、一方では銀行券流通高の増大を伴う前貸のみが流通手段の前貸とされ、また他方では、銀行の資本にはねかえって来るかぎりでの前貸が、資本の前貸と考えられるのであるが、これらも、それぞれに現実に意味を持つ区別であるとはいえ、それぞれ、けっして流通手段と資本との区別ではないことがあきらかにされているのである。